

〔書評〕

竹内美智子著

『平安時代和文の研究』

根 来 司

高著『平安時代和文の研究』の著者竹内美智子氏に早く「時枝・国語学・源氏物語」(「解釈と鑑賞」昭和五十年四月号、特集紫式部へ關をみつめる眼と作品)という論文がある。時枝誠記博士の国語学研究と源氏物語研究について述べられたものであるが、この論文は、「源氏物語」は、時枝博士の「言語過程説」が成立し展開していった四十年間を通じて、その研究対象であった。私は、昭和二十二年から三十六年まで、「源氏物語」を中心とした「日本文法」の講義を受けたのであるが、その間、博士が「源氏物語」の表現について価値評価された記憶を全くもっていない。これは、同じころ平安文学に関する講義を受けた池田龜鑑博士の場合ときわめて対照的であったために、よい印象に残ったのだと思う。」というふうにはじまる。読まれるように竹内氏は時枝博士門下の才媛であるが、この論文は、「この論は、『時枝国語学』として『源氏物語』の読解はなんであったか』に対する一つの解答であって、『源氏物語』そのものが時枝国語学にとってなんであったか』に答えたものにはなっていない。これは私が時枝国語学にとっては前者のほうが本質的な問題であろうと思つたことと、私自身が時枝博士のもとで国語学を学んだ者であるという情況に由来するものである。」というように結ばれる。こ

れは時枝博士の言語に対する理論や学問に対する姿勢に心をひかれたいとの好論であり、私は序説として収められてもよかつたと考える。

それにしても時枝博士の講義は名講義であつたようで、私はやはり時枝博士門下の国語学者尾崎知光氏が「源氏物語私読抄」(昭和五十三年、笠間選書)を公刊された時、そのはしがきに「序に代へて」として、「私は中古文学の専攻者でもなく、源氏学者でもない。しかし源氏物語の一読者ではある。思へば大学の学生のころ、故時枝誠記先生から源氏の講義をきき、そのよみ方に開眼させられたのが、この作品への関心のはじめであつた。時枝先生の講義は源氏物語の文章を通して、国語の本質をさぐりあてようとするものであつたが、すこぶる名講義であつて、多くの学生を魅了したものである。」と述べておられたのを思い起こす。私はこのたび竹内氏の『平安時代和文の研究』を第一章から第二章、第三章、第四章、第五章、第六章と読み進めあとがきまで読んで、これは時枝博士門下生の高著であると考えた。それはそのあとがきに、源氏物語や枕草子に代表される平安時代の仮名文学はほとんど漢字、漢語に頼ることなく、専ら和語を用いて平仮名で書いていった。そして紫式部や清少納言はこ

の和文でもってすぐれて個性的な文章表現の世界を形成することに成功している。この時代の男性知識人たちは漢語を用いて漢文を書いたが、女性たちにはそのような表現手段は許されなかつた。そこで女性たちは本来の日本語である和語を用いて和文を書き、それによつてどれだけの文章表現が可能であるかその限界に挑む運命を担わされた。このような事情のもとになつた平安時代の和文には本来の日本語が持つている表現の可能性が随所に示されているはずであるといふふうには高らかに宣せられているのを見ても知られる。

さて本書にはこの種の学術書には珍らしく序説はないが、次に本書の目次をあらかた掲げてみよう。

第一章 和語の性格

源氏物語を通して見た和語動詞の性格について

源氏物語の形容詞について——語基の構成方式と語基の性格を中心に

第二章 語彙と作品の性格

和泉式部日記の諸本とその語彙

和泉式部日記の語彙的特色

第三章 和文体と訓読文体における語義の相異

「あぢきなし」における二つの意味

枕草子類聚段と「あぢきなし」と

第四章 語と表現形成

「桐壺巻」冒頭の解釈——「あいなく」「あぢきなう」を中心に

源氏物語の複合動詞

第五章 和歌・和文の助詞・助動詞

和歌・和文の助動詞の体系 I——相互承接の順序と接続との関

係——

和歌・和文の助動詞の体系 II——相互承接の順序と意味との関

係——

係助詞「こそ」について

第六章 平安時代の文章活動

平安時代の公的文章活動

女手と和文

索引

既発表論文と本書との関係 あとがき

これが目次であるが、これだけでは本書がまだよくわからないと思うので、すこし内容を要約してみようと思う。第一章和語の性格では、まず源氏物語を通して見た和語動詞の性格について考察されるのであるが、はじめに現代の文章において和語の果たしている役割を見、ついで源氏物語における和語の基礎的な動詞の性格について考えられる。続いて源氏物語に用いられる和語動詞の派生を探り、和語動詞の複合に関して述べられる。平安女流文学の語彙を考究するといひながら私のように専ら形容詞語彙、形容動詞語彙を注意している者にとっては、竹内氏が物事を叙述する上で最も重要な動詞語彙の部門で、源氏物語が非常に豊富な語彙量を持ち独自の表現の領域を持つていることに注目していられるのは大変教ええられる。次に源氏物語の形容詞について考察されて、はじめに形容詞の語基の性質と語基末尾の音との関係、形容詞の語基の音節数と語基構成方式との関係を考えられ、源氏物語で用いられる形容詞語基と動詞語基との関係の仕方を探り、さらに形容詞語基と体言との関係、形容詞語基と副詞との関係を探られて、この節をまとめられる。

第二章語彙と作品の性格では、和泉式部日記を考察される。まず和泉式部日記の諸本とその語彙を考察され、和泉式部日記の諸本には寛元本・三条西本・応永本の三系統があるが、和泉式部日記の系統の異なる諸本の間では語彙にどれくらいの相異があるか、和泉式部日記の同系統に属する諸本の間ではどれくらいの確率でその系統の語彙の特色が保たれているか、そして最も異文の生じやすい語彙は何かを問うておられる。このように和泉式部日記の語彙について異なる三系統の本文を比較し、仮名文学の本文が平安時代の言語資料としてどれだけ確実なものであるかを検討されたのは興味深い。次に和泉式部日記の語彙の特色を考察されて、和泉式部日記を専ら内面的主観的に心のうちのことを記そうした自照的な日記であり、その日記の性格は蜻蛉日記のそれに最も近いように思われるとされる。これは和泉式部日記と源氏物語との語彙の共通率について調べ、和泉式部日記語彙の品詞別百分率について見、和泉式部日記の異なる語数とその言語量との関係について見、和泉式部日記の名詞について見られた結びであるが、数量的に見てこれだけのことがいえれば上々であろう。

第三章は和文体と訓読文体における語義の相異を考察される。「あぢきなし」における二つの意味は「あぢきなし」の源氏物語と枕草子に見える二つの意味の系譜をたどられた論文である。訓読文における「あぢきなし」の意味について考え、和文における「あぢきなし」の意味について考えられた上で、源氏物語の「あぢきなし」と枕草子の「あぢきなし」に及ぶのであるが、「あぢきなし」を通して見た源氏物語と枕草子で紫式部と清少納言の「あぢきなし」の使い方と比較されて、紫式部の源氏物語は「あぢきなし」の意味領域を

広く使い適切に使い分けているが、全体としては主情的意味に使っているのに対して、清少納言の枕草子は客観的意味にしか使われていずここに枕草子の特異性があると説かれる。私は竹内氏の論文でもこのような論文をとりわけこのもしく思う。そういえば続く枕草子類聚段と「あぢきなし」とは枕草子の「あぢきなしもの」の章段をめぐって、いわゆる類聚的章段なканずく「あさましきもの」型の章段が文章表現としてどのような様式のものであるのか、またその表現のねらいがどこにあるのかという点、いま一つは「あぢきなし」という語が平安時代にどれだけの意味領域を持っていたのか、そして清少納言はこの語の意味領域のどの部分をどう使っているのかという点について見られた論文である。これは類聚的章段の表現様式を説き、「あさましきもの」型章段の性格を説き、枕草子の「あぢきなしもの」の章段と「あぢきなし」の意味について説かれるのであるが、枕草子の「あぢきなし」の使い方が枕草子では清少納言の納得できる論理で説明できない事態や見通しの確かさ、意志の一貫性を欠く行為について、第三者の立場から客観的に批判する場合に使うと結ばれる。この論文で説かれるところは正鵠をえていると考える。枕草子は竹内氏がいわれるように読まなければならぬであろうと思う。

進んで第四章語と表現形成であるが、源氏物語を考察されてまず「桐壺巻」冒頭の解釈がある。これは「上達部、上人なども、あいなく目をそばめつつ、「いとまばゆき人の御おぼえなり。もろこしにも、かかることのおこりにこそ、世もみだれあしかりけれ」と、やうやう天の下にもあぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしも引きいでつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれど、

かたじけなき御心ばへのたぐひなきをたのみにて、交らひ給ふ」とある「あいなく」と「あぢきなう」を主にして、諸説の間に一致を見ないこの部分の解釈に、試案を提出しあわせてこの冒頭の部分が源氏物語の中で占める位置を考えておられる。次の源氏物語の複合動詞は「思ひ」を前項とする複合動詞を問題にし、「夢浮橋巻」の最後の、「いつしかと待ちおはするに、かくたどしくて帰り来たれば、すさまじくかなかなりと、おぼすことさまさまにて、人の隠し据ゑたるにやあらむと、わが御心の思ひ寄らぬ限なく落し置き給へりしならひにとぞ、本に侍る」とおわる「わが御心の思ひ寄らぬ限なく落し置き給へりしならひに」のあとに、「おぼし疑ふ」という語がことばにならない思いとして籠められているのではないかと考えられるのである。

続く第五章和歌・和文の助詞・助動詞は本書中、最も長大な章である。うち和歌・和文の助動詞の体系Ⅰはかつて竹内氏が明治書院の『研究資料日本文法6助辞編(二)助動詞』(昭和五十九年五月)の中に「助動詞の分類」として四十二頁にわたって書かれたものであり、和歌・和文の助動詞の体系Ⅱはやはり『岩波講座日本文語7文法Ⅱ』(昭和五十二年二月)の中に「助動詞(1)」として八十四頁にわたって書かれた長大作である。この長大な和歌・和文の助詞・助動詞の章についてはのちほどくわしく述べたいと考えるので、さきに進みたいと思う。

これに続く係助詞「こそ」についてははじめに係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の強調の仕方について述べ、ついで係助詞「こそ」を通して源氏物語と枕草子を考えていかれる。ここで竹内氏は源氏物語の文章には人間存在のすべてを取り込んでやまないうねりのような力が

あり、そのことは遣いにも人間の思念情念が絡んで底深いかげりを感じさせる。これに対して枕草子の文章はある一つの世界を選び取り夾雑物を捨てて、それを鮮明に描き上げようとした文章であり、そのことは遣いは余情のように滲み出るものをむしろ斥けてかっきりした明るさがあるといっておられるが、源氏物語と枕草子でこういう点を問うのはやはりよいと思う。

おわりの第六章平安時代の文章活動ではまず平安時代の公的文章活動を考察されるのであるが、まず実用的な文章活動で法典の制定、公文書の作成、国史の修撰、公家の日記について述べ、文学的な文章活動では漢詩文、和歌について考えられる。次に女手と和文について考察されて、はじめに漢字・漢文の地位を考えられ、ついでかな文字と文章との結び付きについて述べられる。なおこのあとくわしい索引が付され、さらにこまかく既発表論文と本書との関係が記されているが、氏が二十数年かかって発表された論文がよく納まるところに納まっているのを感じる。

ところで、竹内氏は最近また『平安時代和文における散文性の形成』(『国語学』第百五十四集、昭和六十三年九月)という調査のいきとどいたすぐれた論文を発表された。この論文はさきに述べた第五章の和歌・和文の助動詞の体系ⅠⅡに深くかかわりを持っているので、『平安時代和文の研究』のほかであるけれども、ここですこし取り上げてみたいと思う。さいわいこの論文は最初に竹内氏自身が六百字ほどの要旨を掲げておられるので、それをそのまま引かせていただくことにしよう。

「和文」は、平仮名の成立を基盤として、平安時代に形成・完成された文章様式の一つである。それは、和語を主要な語彙

としながら、和歌のみならず漢文・漢文訓読文からも影響を受けてつ成熟し、「源氏物語」に至って完成の域に達したといえる。この稿は、十世紀頃の和文を対象とし、和文独自の散文性がどのようにして形成されていくかを、助動詞の使用状況の面から探究したものである。

調査に当たっては、十世紀前半に成立した「伊勢物語」「竹取物語」「土佐日記」のグループと、十世紀後半に成立した「大和物語」「うつほ物語」「蜻蛉日記」のグループに資料を分けて、両者の間に見られる散文性の形成の進展状況を明らかにすることを試みた。

和文における散文性の形成を測る基準として、ここで取り上げたのは、助動詞の「つ・ぬ」である。この助動詞は、古代日本語の助動詞の中で、平安時代に入って最も大きくその用法に変動の生じたものである。

この「つ・ぬ」の用法の変化を、十世紀前半の和文と十世紀後半の和文とはどのように異なる形で反映しているか。それを通して散文性の形成過程を探ろうとするものである。

これが全文であるが、この論文は見られるように平安時代十世紀頃に成立した和文の文学作品伊勢物語、竹取物語、土佐日記、大和物語、うつほ物語、蜻蛉日記の六作品を選んで、十世紀前半の伊勢物語、竹取物語、土佐日記と十世紀後半の大和物語、うつほ物語、蜻蛉日記とで、古代語の助動詞中平安時代にはいつても最も大きく用法の変化した助動詞「つ」「ぬ」の、その用法の変化がどのように異なる形で反映しているかを探り、それを通して散文性の形成過程を考えられたものである。そこで氏が伊勢物語、竹取物語、土佐日記

における「つ」「ぬ」の使われ方を調査し、ついで大和物語、うつほ物語、蜻蛉日記における「つ」「ぬ」の使われ方を検討された結果、氏のいわれるところは肯綮に当たっていると考える。それは平安時代の十世紀前半を草創期とすると十世紀後半は散文性の形成が進展した形成期ということができるが、この過程でとりわけ注目されるのは和文の散文性の形成に日記が果たした役割である。誰しもが考えられるように日記の世界は物語の世界に比べると狭く限られた場面の叙述であるが、蜻蛉日記はまことに夫を待つ満たされない妻の身の上を書くことの飽くことを知らぬ繰り返しであるけれども、そのような素材的には豊かでない文学作品の中でこそかえって文章が磨かれていったことは興深いとされる。『平安時代和文の研究』の第五章に取められた和歌・和文の助動詞の体系ⅠⅡは氏の力作であって、そこから発展したこのような研究はすばらしいと思う。

このように竹内氏の助動詞の研究について述べ私が思い起こすのは氏が時枝博士の他に平安文学の講義を受けられた池田龜鑑博士の、平安女流作家の用いる助動詞「らむ」に関するすぐれた研究についてのことである。いま池田博士の『古典の読み方』（昭和二十七年、学生教養新書）をひもとき、古典はどのように読まれるべきかの章を見ると、「らむ」の文法的特性をよく説いていられる。たとえば枕草子の「鳥は」の章段の「鳥は、ことどころのものなれど、鶯、いとあはれなり。人のいふらむことをまねぶらむよ」をはじめとして「木の花は」「花の木ならぬは」「鳥は」「虫は」「草の花は」の諸章段のこの類の「らむ」に注目されて、「同じ推量の助動詞として扱われていても、この「らむ」だけは枕草子には独特な意味に使われていることが注意される。すなわち、この「らむ」は、枕草子

の本質にかかわりのあることばなのである。つまり、作者の世界観の構造に深い関係をもっていることばで、枕草子を読む人は、誰でも必ずこの助動詞に注意しなければならないという重要なことばなのである。その考察が深まれば、必ず枕草子のな世界の秘密にふれることができるという確信のもてることばなのである。」と説かれる。それは作者の直接経験というより間接的经验で伝説や書物からえた知識が根拠になって用いられてい、この「らむ」が枕草子の知性的性格を考える上に重要な語の一つであるとされるからである。私は池田博士がこの種の「らむ」の出来る諸章段が決して作者の単なる直接経験の反省でないのだと説かれている、そのところがよいと思う。竹内氏の研究は池田博士のこうした研究とも一つらなりであると感じる。

最後に竹内美智子氏にすこしうかがっておきたいことがある。それは本書のあとがきに歴史学者石母田正氏が源氏物語の偉大さを述べられ竹内氏がそれにこたえようとされたことがしるされている、このことに関してである。石母田氏は源氏物語のどういう点が偉大であるといわれたのであろうか。私は不勉強でこのすぐれた歴史学者の著書は二冊しか読んだことがない。一つは伊賀国の山間の一荘園の歴史を分析し、古代世界から中世世界への転換の本質を描き出された『中世的世界の形成』（昭和二十一年）で、もう一つは戦後の平家物語の新しい研究のいとぐちを開かれた『平家物語』（昭和三十三年、岩波新書）である。さいわい昭和六十三年より岩波書店から『石母田正著作集』（全十六巻）が出はじめ、第十一巻は『物語と軍記の世界』である。その第十一巻の内容は、

宇津保物語についての賞書——貴族社会の叙事詩としての藤

英のことなど 源氏物語（『日本文学史辞典』） 紫式部
今昔物語 作庭記 古代末期の貴族精神——その一側面について 丸山二郎校註『愚管抄』 『愚管抄』の面白さ
『中世散文集』について 古代の文学と政治 『平家物語』
『書評』西郷信綱著『日本古代文学』 『書評』永積安明著『封建制下の文学』 『書評』永積氏の「方丈記」と「徒然草」を
読んで

となるようである。刊行されたらぜひ読んでみようと思う。

（昭和六十一年五月二十五日 明治書院刊 A5判 四二六頁 七八〇〇円）

——神戸大学教授——

（昭和六十三年十二月十九日 受理）